

むか「局アナ」いま「隠居」

「黙れッ！」



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中

炬燵で原稿を書きながら
 横目で漫然と刑事ドラマを
 観ていました。

旦那が警部、妻は科捜研
 技官という設定です。

名取裕子扮する嫁はんが
 あまりツベコベ正論を並べ
 立てるものですから旦那が
 ブチ切れて怒鳴りました。

「黙れッ!!」

カッコ良かったですなあ。
 怒鳴れるものなら一度で
 いいから怒鳴ってみたい。
 どんなに スッキリする
 ことでしょう。

私は結婚して55年もの間、
 家内に暴力を振るったり、
 「黙れッ!!」
 と怒鳴ったりしたことは、
 一度もありません。

これは私が偉いのでなく、
 「そりゃあ奥さんが出来た
 お人やからなあ」
 というのが周りの方々の
 御意見なので、私もそれを
 認めざるを得ないのです。

*

当然のことですが、人が
 意見を述べている最中に、
 その発言を遮って、
 「黙れッ!!」

と一喝するようなお人は、

無神経なアホは別として、
 概ね 目上の人や偉い人……
 つまり、支配者や権力者に
 他なりません。

とりわけ 昔の権力者は
 「生殺与奪」の権能を握って
 いたので、その権力たるや
 絶大なものでした。

ですから「黙れ」の一喝は
 時代劇やチャンバラ映画の
 中でこそ頻繁に有効に活用
 できるのです。

「黙れッ!!」

「黙らっしやい」

何れも 似たような意味
 ですが、こういうセリフは
 見るからに 権力や 暴力を
 背景にした悪人面の俳優が、
 引き受けていました。

しかし、水戸黄門の従者、
 助さん格さんの決め台詞は
 カッコいいです。

「黙れッ!! このお方を、

何方と心得る。畏れ多くも
 先の副將軍、水戸光圀公に
 あらせられるぞ。頭が高い。
 控ええッ。控ええろウ!!」

「ははあーッ」

……と土下座して一件落着と
 相成るのですから、「遠山の
 金さん」もそうでしたが、

当時の厳しい身分制度は、
 支配者にとって実に気分の
 いい世の中だったようです。

*

まあ 江戸時代だったら、
 面白がつていれば、それで
 よろしいが、昭和になって
 こともあろうに言論の府、
 衆議院 特別委員会の場合、
 官僚が国会議員に向かって、
 「黙れッ!!」
 と一喝しました。



一九三八年(昭和13年)、
 周辺情勢がキナ臭くなつて、
 国家総動員法という法案が
 陸軍省から出されたときの
 ことです。

法案説明を担当したのは
 陸軍省 軍務課 国内班長の
 佐藤賢了という中佐でした。
 彼は 力み過ぎて勘違い

したのか、長々と大演説を
 ぶったものだから、
 「演説はやめさせろ」
 「討論ではないじゃないか」
 とヤジを飛ばした議員に
 向かつて 佐藤中佐が、
 「黙れッ!!」

と怒鳴ったものだから
 委員会は紛糾したあげく、
 散会してしまいました。

後日、陸軍大臣の陳謝で
 収まったのですが、何故か
 佐藤中佐にはお咎めなし……。

この一件が契機かどうか
 判りませんが、佐藤さんは、
 後に東條総理の側近として
 辣腕を振るったのです。

これがいけなかったのか、
 戦後は「最年少のA級戦犯」
 として、10年ばかり 巣鴨の
 牢屋に入っておりまして。

出獄後、半藤一利さんの
 インタビューを受けた彼は、
 「備えなき平和は幻想だ」
 と息巻いたそうですが、
 これとて「専守防衛論」に
 過ぎません。

戦略的 平和論を掲げて、
 アメリカと一緒にアラブへ
 兵を進めろ……とは、いくら
 佐藤さんでも言い遣しては
 いなかったようです。

「英語で「黙れ」ちゅうのを
学校で「シャットアップ」と
習うたけどな、西部劇を
観よったら「シヤラップ」と
言うとなつたわ。カッコエ
のう」

敗戦の八カ月後、私は、
旧制の徳島中学に進学し、
戦時中は禁止されていた
英語を初めて習いました。

前年、鬼畜米英に身内を
殺された上、家も焼かれた
私でしたが、英語を習い、
占領軍の姿を目の当たりに
しているうちに鬼畜米英が
カッコよく見えてくるから
情けない話です。

英語をペラペラ喋る輩が
賢そうに見えたり商品名が
横文字やカタカナだったら
上等と思ったりしました。

歌謡曲よりジャズ、邦画
よりハリウッド映画が上等
だと思っていましたので、
「シヤラップ」に限らず、
ハリウッド英語や、ジャズ
英語のほうが、文部省英語
よりカッコ良く楽しかった
ですねえ。

「ドンマイ」「ゲラウェイ」
「ボタンボウ (Buttons
and Bows)」などなど…。

西部劇の「シヤラップ」も、
時代劇の「黙らっしゃい」も
「黙れ」もカッコいいですが、
このご時世に、弱い立場の
人に向かつて、

「黙れ」「うるさい」「喧しい」
などと怒鳴るのは時代錯誤

…というよりも、
「お行儀が悪い」

「乱暴なお人だ」

「威張ってますネ」

「パワハラでっせえ」

と言われるに違いありま
せん。



私がまだ若手アナだった
一九六〇年代に上司から、
「うるさい!!」

大声で怒鳴られたことが
あるのです。

そのころの朝日放送には、
「アナウンサー室」という
かなり広い独立した部屋が
充てがわれていました。

その部屋は局アナ専用の

楽屋というか控室というか、
それとも事務室というか、
少し変なオフィスです。

放送のあと寛いでいる人、
原稿の下読みをしている人、
徹夜仕事のあとソファで
眠っている人、緊張を解す
ため バカ話をして大笑い
している人など…。

外部の人が見たら異様な
オフィスかも知れません。

アナウンサーは喋るのが
商売ですから、オフィスの
片隅で静かに本を広げる
人はそんなにいないのです。

まあ大世帯でしたから、
学究肌のお人も いるには
いるのですが、

「陰気くさい奴だなあ」

…と 何だか浮いた存在に
なりがちでしたねえ。

*

「アナウンサー室長席」から、
いちばん遠いところにある
ソファ周辺は若手アナの
「溜まり場」でした。

その日も私たちは放送を
終えた解放感もあって、

「ギャーギャーワハハ」

高声で楽しく喋っていた
のですが、突如、

「うるさい!!」

偉いさんの席から罵声が
飛んで来たのです。

声の主は、年齢、入社歴、
卒業大学ともに七年も先輩、

「K」さんで、電話しながら
こちらを睨んでいました。

彼は大学に入る前、海軍
兵学校に在籍していたので
罵声にも迫力があります。

しかし怒鳴られた当方は
戦後民主教育で洗脳された
アプレゲールですから、

「うるさいとは何ですかッ」
つい大声で怒鳴り返した

私でしたが、ややあって、
「いやあ、ちょっと言い過ぎ
ました」

「僕も軍隊調だったな。実は、
さっきの電話…国際電話で
聞き辛かったもんでなあ」

しかし、今にして思うに
聞こえ辛かったのは、国際
電話の回線状態が悪かった

のではなく相手の外国語が
解り辛かったからでは？
と疑っているのですが…。

ところで、彼が叫んだ、
「うるさい!!」

という罵声の怒鳴り方や
大きな声は まるで 乱暴な
オッサンだったのですが、

言葉そのものは「乱暴語」や

「ヤクザ語」ではないので、
「アナウンサーの言葉選び」
としては問題ありません。

まるでヤーサンみたいに、
「うるせえ(関東)」だとか、
「じゃーかつしやい(関西)」

なんて、思わず口走って
しまうようだと、共通語で
メシを食っている局アナの

管理職としては失格です。

*

若い頃、「局アナの楽屋」
のようなアナウンサー室で、
大阪弁や、柄の悪い下品な
言葉遣いをしていますと、
「本番で出てまうぞ」

と先輩に注意されました。
ときには、

「大阪弁の影響を受けない
よう、東京出身の女と結婚
したらどうだ」

縁談を勧められたことも
あったのですが、事なかれ
主義で小心者の私は、故郷
徳島の土着民と結婚して
います。

その私も、局アナを辞め、
隠居となつて、心おきなく
徳島訛りの大阪弁で喋って
いますが、近ごろは大阪の
土着民である倅や、孫娘に
徳島弁が伝染しとるらしい。